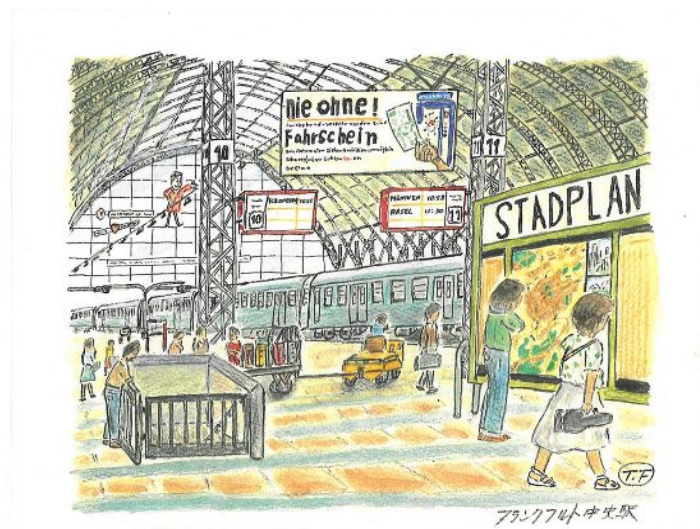


西欧・東欧見聞録

(ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行)



西欧・東欧見聞録（ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行）

エピローグ（魅惑のパリ）

さあ、憧れのパリだ。まずはインフォメーションで宿をとる。よし、一年間気合を入れて勉強したフランス語の出来を試す時だ。順番を待っていると、日本人の家族連れにあった。“これから宿をとるのですか？”“そうですよ。”家族で旅行しているらしく、ちいさな娘さんを二人連れてきている。インフォメーションの窓口でまずはフランス語で“ボンジュール。エクスキュゼモア、ジュヴードレ・アボワール・レゼルバシオン・ドテル。パルレ・ブ・オングレ？”（こんにちは。ホテルを予約したいのですが、英語を話しますか？）と言ってみる。”Oui ウイ”（はい）と帰ってくる。通じたぞ。しかし、その後は、英語で私と、ご家族連れのぶんの宿を取ったのだが、なんだかひどくつっけんどんなので、最後にドイツ語で”バスフィアー・アイネ・シュレヒテ・ベディーヌング！”何てひどいサービスだ！と言ったら周りの、ドイツ人と思われる連中に非常に受けた。家族連れのお父さんがびっくりして“ドイツ語も話すのですか？”としきりに感心してくれた。聞けば、北大の数学の教授で、以前ハイデルベルク大学に留学していたこともあり、今回は家族旅行でドイツとフランスを周遊されているとのことだった。紹介されたのはサンマルタンの安宿である。

みんなで宿に向かう。あこがれのメトロ。ディレクション（行き先）、アントレ（入り口）、ソルティエ（出口）、コレスポンドン（乗り換え口）の表示を頼りにメトロに乗ってサン・マルタンへ。宿の女主人に、今度は全部フランス語でトライしてみる。先払いとのことだが、いま、手持ちの金がないから両替をした後でもいいかということまで伝えることができた。北大の先生も無事チェックイン。

まず、両替をしに東駅に行く。そしたら驚いた。何と、バルセロナに行く列車で一緒になった女性と偶然会った。ポルトガルに行っていたという。再会を喜んだあと、またお互いの前途を祝してわかれた。やはり、所詮、このような旅行をしている人は、私も含めて、自分勝手な行動のとれる一人旅のほうが良いのである。前払いの宿代を払った後、ストラスブール大通り（これは更に南に行くと、セバストボル大通りとなり、更にセーヌ川を渡るとサン・ミッシェル大通りとなる。）沿いのビストロで昼からワイン付きの優雅な食事。最高の気分。ワインでほろ酔い加減となり宿に戻って昼寝。外で遊ぶ子供の声。幸せな気分。その後フォーラム・レ・アール、シテ島、ノートル・ダム寺院、市庁舎と歩く。夢にまで見たパリの風景が、すぐ目の前にある。

シテ島はパリの中心であり、その名の由来であるケルト系パリシー人が、この島に集落を作ったのが始まりであるそうである。ノートルダム寺院の下流には、パリ警視庁、最高裁判所、フランス革命の時、拘置所となったコンシェルジュリーなどがある。マリー・アントワネットやダントン、ロベス・ピエールなどがギロチンにかけられる前に収容された。マリー・アントワネット

は、オーストリアの女帝マリア・テレジアの娘として生まれ、奔放かつ傲慢、革命にも屈しなかった。

この美貌の王妃が、ただ一度泣き叫び許しを請うたのは、7歳の息子の助命であったという。この王妃の髪の毛が、一夜にして白髪になってしまったとの逸話を聞いたことがある。これらの事柄に、目の前の景色を見ながら思いを寄せた。宿の近くのマクドナルドで夕食。280円、安いコペンハーゲンでは1200円相当である。

翌朝。女主人がブチ・デジョネーとおこしにくる。テーブルでは若い白人女性と一緒に。どこから来たのかと聞くと、カナダのサスカチュワンだというのが、あまり話をしたくないらしく、重苦しい雰囲気。

ストラスブール・サンドニの駅からメトロでコンコルドへ。メトロの駅には、フランクリン・ルーズベルトや、ジョルジュ・サンク（ジョージ5世）など人名や、9月4日駅など戦争にちなんだと思われる駅名が多い。

コンコルド広場、シャンゼリゼ通り、凱旋門、シャルルドゴール広場と散策する。コンコルド広場には、エジプトから送られたというオベリスク。シャンゼリゼ大通りは公園のようなおりだ。凱旋門に向かって、緩やかな上り坂。公衆トイレが少ない。ところどころに小さなドームのような公衆トイレがあるが、これは金を払わなければならない。1フランを入れるとドアが開き、使用中は音楽が流れる（ここまでしなくてもいいような気もするが、そこはさすがのパリなのであろうか）。

凱旋門のある広場は、シャルル・ド・ゴール広場と言われるが、12本の道路がここから星のように放射状にのびることからエトワール広場とも言われる。凱旋門はパリの象徴。19世紀の初めにナポレオンの命をうけて、フランス軍の凱旋のために立てられたものである。結局、ナポレオンはここを遺体となって通った。またビクトル・ユーゴーの遺体が、一夜安置されたりもした。凱旋門の真下には、第一次大戦の無名戦士を悼む永遠の炎が燃えている。

シャンゼリゼのカフェ。ゆったりと優雅な時間が流れる。歌手のクレモンティーヌはいみじくも”お金を払って、時間を買うのよ。”といったそうだ。

パレ・ロワイヤル、ラーメン屋があった。しかも400円程度で安い。食べてみたら結構うまかった。結局、この店に昼飯に3日間通ってしまった。やはり日本人はラーメンが恋しくなるのである。コンコルド広場で、写真のぼったくりにあった。勝手に写真をとっておいて100フランせびる。いらぬといっても聞かない。結局一枚、ただであげるからと100フラン払わされた。やられた。じいさんだったので油断してしまった。非常に頭に来てしまいそのあとノートルダム寺院に上ったときに中に浮浪者がいて金をくれとせがまれたが、働け”トラバークユ！！”と怒鳴ってやった。まあそれで幾分かはずっきりした。

その辺を散策した後、今日は宿でゆっくり飯を食べようと思い。スーパーで食べ物や、飲み物を買って宿に戻った。このような一般市民と同じことをしたほうが、旅情が深まるような気がする。せっかくパリに来たのだから、チーズ（フロマンジュ）とワインも忘れずに買った。

8月7日は朝から小雨のそぼ降る天気だ。今日はルーブルに行こう。雨のパリ。これもまた一興。ルーブルは雨でも平気だ。もぎりは北アフリカの黒人。ミロのヴィーナス、サモトラケのニケ、モナ・リザ、ダヴィッドのナポレオン一世の戴冠式など超有名な美術品をゆっくり味わう。古代エジプト、ギリシャ、ローマ、オリエント美術から近代美術までそろそろ。世界一の美の殿堂といわれるゆえんだ。私にとってはラファエロの”美しい女庭師”ドラクロワの”民衆を率いる自由の女神”が印象的だった。ルーブルで、ゆっくりと時間を過ごした後、また市内の散策に出かけた。カルテ・オランジュを買う。これは、パリの地下鉄や市内バスに乗り放題の、1週間定期である。しかも安いので。重宝する。写真を貼る欄もあったが、パスポートを紛失した際のために持っていた予備の写真を使う。もうパリまで来れば、何とでもなりそうだ。

雨が降っているので傘を買おうと思って、プランタンの三越に行って、案内のフランス人女性に安い傘は無いかとフランス語で聞いたら、ギャラリー・ラファイエットに行ったらありますと日本語でかえてきた。

行ってみると、巨大なデパートで探しているうちに雨がやんでしまい、結局買わずにすんだ。いかにもパリのデパートで、その華やかな雰囲気は日本のデパートとは比べ物にならない。オーシャンゼリゼを口ずさみたくなった。“オーシャンゼリゼ、オーシャンゼリゼ、オソレ・ソラピュリ、ア・ミディ、ウ、ア・ミニユイ、イリヤ・トスケ・ブブレ、オ、シャンゼリゼ”（シャンゼリゼには、シャンゼリゼには、天気の日も、雨の日も、昼も夜も、あなたの望むものがある。というのが直訳である。本屋で仏英・英仏辞典を買った。ランゲンシャイドではないが、同じようなポケット版である。

食料品屋で冷えたミネラルウォーターが飲みたくなり、“エスキリヤ・ユヌ・エビアン・ビアン・フロワ？”冷えたエビアンはありますか？と聞いたら、生憎と冷えてないのしかないと帰ってきた。ちゃんとフランス語が通じる。うれしくなる。“オ・ルボアー”さようならと別れる。シャンゼリゼは高いので、パレ・ロワイヤルで夕飯を食べて宿に戻る。

そういえば、雨に当たったのは、コペンハーゲン以来のことだった。スペインでは、毎日が灼熱の太陽だったのだ。さすがに長旅で、疲れてきてもいたのでパリの雨は、気持ちを落ち着かせてくれるものだった。ショパンの雨だれのような優しい感じ。

サンマルタンの宿は今朝までだったので、北大の先生とその家族にお別れをいい北駅に行き、宿をとる。財布を出していたらアメリカ人のおばさんに不心得だよと注意された。東駅よりも近代的で旅愁が漂っている。東駅は、昔から東部戦線へ送られる兵士が乗り込む駅だったころから、どことなく暗さを感じさせる駅だったとのことだが、北駅は、ベルギーやオランダ方面の出発駅で、現在は、ユーロスターの発車駅にもなるくらいで明るい感じがした。ここのインフォメーションでパリをたつ8月11日までの宿をとる。（下：リュクサンブール宮殿）



セーヌ左岸、メトロのモンジュ駅からムフタール街を下った Rue Lhomond 53 番地、ローモンド街 53 番地のレジデンス・クーベルタンというところ。よかった。個室。廊下の電気は時間がたつと消えるのは皆同じ。これは 7-8 月のみ空いている物で、ソルボンヌあたりの学生の寮をバカンスの間だけ開放しているのだろう。荷物を置いた後、オランジェリー、オルセー美術館に行く。オランジェリーのルノワールのコレクションが良かった。チュイルリー公園にたたずむオランジェリー美術館、これは印象派美術館でモネの睡蓮が有名。またルノワールの Fillettes au Piano (ピアノの少女) などもあった。しかし、私が最も気に入ったのは Deue Fille (二人の少女) で、絵はがきも売っていたが、日本にもあるだろうと思って買わなかったところが、日本に来ては、ついぞお目にかかることが無く、非常に後悔した。あと驚いたことだが、オランジェリーもオルセー美術館も世界的に有名な美術品が、手の届く位置にガードなしで展示してある。

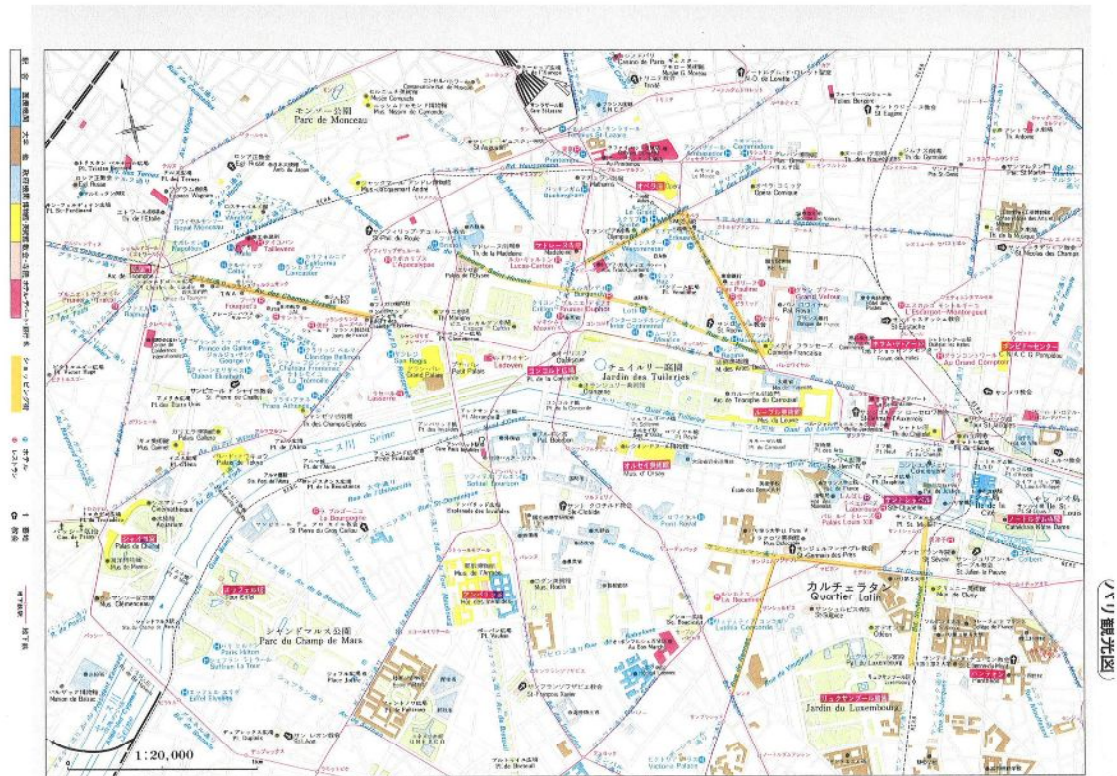
オルセー美術館はゴッホの絵や、セザンヌ、ゴーギャン、ルノワール、ルソーなど印象派の殿堂。やはりルノワールの” ムーラン・ド・ラ・ギャレット” はよかった。かつてはオルセー駅だった。随所にその雰囲気漂わす。テラスからはモンマルトルの丘サクレクール寺院が見える。

宿まで歩く。サンジェルマン・デ・プレ教会、サン・ミシェル大通り、サンジェルマン大通り。ソルボンヌ大学。サン・ミッシェル大通りからサン・ジャック通りに入るとソルボンヌ大学の法学部がある。いわゆるカルチェ・ラタンである。今何時 “エスク・ブザベラー?” と聞いてくるパリジェンヌ。 “ボンジュール・ムッシュ” と挨拶してくるフランスのかわいい女の子達。警察に追いかける車。カルダンデザイン制服をきた警官。

すべてパリ、いかにもパリである。ただ街は以外に汚い。掃除をする人が、職をなくさないように、わざと掃除をしないとか。 (下: 私のお気に入り、リュクサンブール公園)



このあたりは、カルチェ・ラタンの近傍で下町の雰囲気が漂っており、ここからリュクサンブール公園、サン・ミッシェル、サン・ジェルマンを超えて、シテ島に至るあたりが、私の最も気に入りの場所になった。リュクサンブール公園は特に大好きで、帰国までしょっちゅうここに来て休んだものだ。リュクサンブール宮はフランス上院。コンコルド橋を渡ったところにあるブルボン宮はフランス下院である。



毎朝、モンジュ通りのカフェでカフェオレ。主人は覚えてくれて、頼まなくても持ってきてくれるようになった。ベルサイユに行く。RER（高速地下鉄）で行った。この駅でも、かわいい女の子達が”ボンジュール、ムッシュー”と挨拶してくれる。

イギリス人の一行と一緒に英語ガイド付きのツアーに参加した。かわいい女の子がいた。太陽王と言われたルイ 14 世が情熱を傾けて作らせた大宮殿。しかし浪費がたたって、財政困難となり庶民の生活も苦しくなって、フランス革命に進んでいく。マリー・アントワネットが好んだというプチ・トリアノンには行かなかった。しかし、このはるか日本から離れたベルサイユで日本の修学旅行の一行を見たのにはびっくりした。

ベルサイユから戻ると、アルマ橋のたもとからバトゥームーシュにのり、セーヌ河下りだ。20 Fr で所用 1 時間 15 分。自由の女神があった。エッフェル塔。革命 200 年記念の電飾がしてあった。今年は 1789 年の丁度 200 年後なのだ。7 月 14 日のパリ祭は、さぞかし盛大であつたらう。

アルマ橋から、セーヌ河を登り、シテ島、サン・ルイ島と過ぎ、折り返し今度は河を下って、自由の女神のところで回って帰ってくる。

帰りはメトロ 6 号線で帰る。6 号線は、地下鉄と言っても高架が多く、エッフェル塔をはじめ、パリ市街の景観を楽しむことができる。テレビのコマーシャルにも流れたことがある光景だ。

翌日、また例のカフェで朝食。今日はゆっくり橋散策をしようと決めた。まずシャンゼリゼのアエロフロートでリコンファームをしておく。

まずモンマルトルの丘に行く、歩いてみる。画家達。ムーランルージュ。テルトル広場の画家

達、観光客、赤いパラソルのカフェ。ロートレックの世界でもある。サクレクール寺院に向かう。よく写真で見るときれいな階段があった。ここから見るパリの情景はすばらしい。市内バスにも乗ってみる。さて今日は、セーヌ河の橋を巡ろう。アレクサンドル 3 世橋、芸術橋、ポン・ヌフなど。1900 年のパリ万博を記念して、ロシア皇帝が寄贈したアレクサンドル 3 世橋はパリで最も美しいと言われる。1604 年竣工の、400 年の時を刻む石造りのポン・ヌフ（新橋）、左岸とルーブル美術館を結ぶ、ポン・デザール（芸術橋）といかにもパリの光景を楽しんだ。ゆっくり橋めぐりを楽しんだあとは、ムフタール街の、L Enfant du Piree というレストランでエスカルゴを食べる。先に食べ終わった人が、ボンナペティと言ってくれる。エスカルゴはおいしかったが、これが原因かどうかはわからないが下痢をしてしまう。



(モンマルトルの丘へ向かう階段)

8月11日。パリの観光の最終日。朝、いつものカフェへ。いつものようにカフェオレを持ってきてくれる。私も感傷にひたり。チップとともに、毎日ありがとう。明日、日本に帰ります。パリは良かった。とフランス語でしたためてカップのそばに置いた。

本日は日曜。日曜はただということもありルーブルにもう一回行った。そして、その後は、がらりと気分を変えてポンピドーセンターへ。ポンピドゥセンターの4.5階はパリ国立近代美術館がある。不思議な建物であるがあまり印象深くない。前の広場では大道芸人がパフォーマンスをしている。



(セーヌ川とアレクサンドル三世橋、遠くにはエッフェル塔を望む)

パレ・ロワイヤルでおみやげを買う。更にシャンゼリゼから実家に電話してみる。 本当につながらるのはびっくりした。

夕方からは雨。パリの床屋で最新のカットを頼むのは断念した。これは、スペインを旅行中に思いついたことで、パリの最新モードのヘアスタイルで日本に帰りたと思ったのだ。大体 6000 円程度だったと思う。クーペという。ただ、調髪してもらうときになんだか話を通じない、つまり世間話が通じないのが非常に気まずい感じがしたのでやめた。

スーパーで、食料、ワイン、チーズ、そしてシャンプーを買う。今までは、備え付けの石鹸で頭を洗っていたので、久しぶりのシャンプーで頭が洗える。スーパーで一般市民の生活にふれるのは、今回の旅行中でも楽しみなことであった。また、気がついたことだが、パリのスーパーでは、みんな買い物籠をもってきてそれに買ったものをいれて帰る。かごを持ってきてない人には、紙袋に入れてくれるのだが、これこそ資源の無駄遣いにならなくてすばらしい慣習だと思った。宿にもどり、明日の、シャルル・ド・ゴール行きのバスの乗り場を確認する。いよいよ今日はヨーロッパ最後の晩だ。町で食べるより、この静かな宿で、パリの市民になった気分でゆっくり過ごしたかった。

8月12日、エールフランスのバスでエトワール広場から40分。シャルル・ド・ゴール空港に着く。アエロフロート。モスクワで乗り換えである。帰りは、モスクワまでは非常にすいていた。日本に行くんだらう小さなフランス人の娘さんが、“こんにちは”と言ってくる。ほのぼのする。“ボンジュール、マダモアゼル”と返してあげる。

シャルル・ド・ゴールを飛び立った飛行機は、まずモスクワに向かう。天気が良く、大都市モスクワが見えた。さすがに大きな町である。本当は、くるときにモスクワ一泊の予定だったが、ホテルが取れなくて滞在できなかったのである。空港の免税店でナポレオンを買う。モスクワからはレニングラードに行っていたという人と隣り合わせ。エルミタージュ美術館はよかった。東回りの飛行機なので、夜がほとんど無い。暗くなったかと思うとすぐに夜が明ける。ほとんど寝てない。時差ボケだ。眠い。やがて午前11時頃、眼下に見慣れた景色が見え出すと、そこはもう関東平野。予定通り成田に着く。なんと蒸し暑いことか。42日間に及ぶ、私にとっての大旅行もさまざまな思い出を作って、ここ成田でフィナーレを迎えたのであった。

(完)

いまから12年前、私がヨーロッパを旅行したときは、まさに20世紀の中でも最もドラマチックな時期だったと思う。これは、記録にぜひ残しておきたいと思いつつもなかなかできずじまいで12年間も過ぎてしまった。昔のことを思い出しながら、また当時の記録をひっくり返しながらか、とにかく私がこの旅行で得てきたものを私の子供たちには伝えなくてはとの思いで、ようやくにして書き上げた。

私は、この旅行を通じて多くの人々、それは日本人もいれば外国人もいるが、に触れ合うことができた。世界観も大きく変わった。本当にこの旅行をして良かった。私の、二人の息子たちや娘が大きくなったときに、この旅行記を読んで少しでも世界に関心をもって、大きく羽ばたいてくれることを祈りたい。

表紙を含め、今市市在住の藤木様には、イラストを描いていただいた。

ちなみに当時の通貨の、換金レートは以下のものであった。

1DM 75yen

1DKr 25yen

1SF 100yen

1Peseta 1yen

1Fr 25yen

総費用 60 万円。出発前の準備で 5 万円。航空料金 20 万円。おみやげ 5 万円とすると 40 日間で 30 万円である。

プロローグ (西ドイツ-オーストリア編)

東欧編 (ハンガリー-チェコスロバキア-東ドイツ)

旅慣れた頃 (デンマーク-西ドイツ-スイス)

情熱のスペイン

エピローグ (魅惑のパリ)

ヨーロッパ行政図



ボンス図法

1 : 17,000,000



完